

—西丹沢の檜洞丸、なぜ丸なのか—

(記 岡本)

山名には普通は山、岳がつくが、先日登った西丹沢の盟主たる檜洞丸（ひのきぼらまる）は「丸」である。誰しも何故かと奇異に思うはずだ。山は幾つもの山名を持つものがある。檜洞丸（玄倉川に流入する檜洞の沢名に由来、洞は沢の意）も頂上の山荘名の「青ヶ岳」、西側直下の沢名をもつ「本棚裏」（裏は 末端の意で本棚沢のつめの山の意）、「彦右衛門谷頭 ノ丸」（北東側の谷名）などの山名を持っている。

丸について、朝鮮語の山を意味するマルであるとする説が定説のようにになっている。他に山頂が丸いからという説もあるが。マルの朝鮮由来説は、木暮理太郎（注 1）が昭和 11 年に提議して以来、「日鮮同祖論」の加勢もあって強まった。木暮は「此等の地方（丹沢山域）が百済人や高麗人に依りて早く開拓されていたことに注意するならば、或いは其等の人々が招来した言葉ではないかとの疑いを生ずるであろう、事実マルは山を意味する韓語（注 2）に外ならないのである」（「山の憶い出」下巻）と断言している。

朝鮮半島からの渡来人が本邦に多大の文物をもたらした歴史的事実があるために、古代的なものに関わる判断では渡来人を絡ませてしまう傾向はないだろうか。反証にはならないかもしれないが、若干の疑問を呈してみる。

その昔は、8 世紀に関東各地の渡来人（1799 人）が武蔵国に集められて高麗郡ができた。それが西武池袋線高麗駅周辺の高麗本郷である。明治になって入間郡に編入されるまで千年以上高麗郡であった。これほど渡来人との関わりのある高麗駅周辺にマルの山があつて然るべきなのに、手持ちの地図では 1 座も見つけれない。高麗周辺は丹沢以上に密に帰化人がおり長い伝統があつたのに、不可解である。

その忖として、渡来人の祖国で山の意味であるマルを付けるなら、何々マルの何々部分についても渡来人は「韓語」を付けようとするのが道理ではないか。西丹沢の丸の付く 19 座（注 3）を調べても全く朝鮮語の臭いさえない。

その参として、韓国の山にはマルの付いた山名が見当たらない。山群の総称に「山」を使い、個々の山に峰を使っている。丸に拘って、船の名前に何故「丸」が付けられているのかを調べると、定説はないが、いくつかの説があつて、それが参考になるのではないか。神話説＝海の民の安曇の始祖阿曇磯良丸に由来、愛称説＝刀や犬のように広く愛される所有物に人名に準じて丸を付ける慣習に由来、人格説＝古来船を人に見立て、名や位階を与える習慣があつた。人名に丸が用いられることから船にも丸を与えた、城 郭説＝城郭の曲輪を丸と呼ぶことに由来。船を城に見立てた。これらのうちで愛称、人格説に関心が引かれる。

西丹沢の山には、山、岳の他に主稜線上の峰に「頭」（あたま）の付いたものが多い。何々の頭の他に何々の肩というように、山を人に見立てることがある。とすれば、船のように愛称説、人格説が山のマルの根拠として浮上してこないだろうか。檜洞丸山行から帰って、不可解なマルの謎を解こうと考えてみた。

（注 1）人文的な「山岳研究」の分野を開拓した。 社団法人「日本山岳会」初代会長

(注2) 朝鮮語大辞典(角川書店)では、板の間、床。 屋根の棟、山の峰、山頂。物事の絶頂、
最盛期

(注3) 西丹沢の「何々丸」(昭文社、吉備人出版地図による) 檜洞丸、畔ヶ丸、検見ヶ丸、西丸、
東丸、中ノ丸、上ノ丸、大丸、小丸、椿丸、ブナノ丸、裸山丸、大杉丸、中ノ沢丸、
榛ノ木丸、大タル丸、 シャガクチ丸(蛇ガ口)、大樺平丸、ヌタノ丸(ヌタバのタ) 19 座 (了)

参考資料

- * 「山名の不思議 私の日本山名探検」 谷 有ニ 著 平凡ライブラリー
- * 昭文社、吉備人出版社地図
- * ウィキペディア檜洞丸、船名